

沼

芥川竜之介

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

昼か、夜《よる》か、それもおれにはわからない。唯、どこかで蒼鷺《あをさぎ》の啼く声がしたと思つたら、蔦葛《つたかづら》に掩《おほ》はれた木々の梢《こずゑ》に、薄明りの仄《ほの》めく空が見えた。

沼にはおれの丈《たけ》よりも高い芦《あし》が、ひっそりと水面をとざしてゐる。水も動かない。藻《も》も動かない。水の底に棲《す》んでゐる魚も——魚がこの沼に棲んでゐるであらうか。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、この沼のほとりばかり歩いてゐた。寒い朝日の光と一しよに、水の※「#」均のつくり、り「、」第3水準「1-14-75」《にほひ》や芦《あし》の※「#」均のつくり、第3水準「1-14-75」ひがおれの体を包んだ事もある。と思ふと又一枝蛙《えだかはづ》の声が、蔦葛《つたかづら》に蔽《おほ》はれた木々の梢から、一つ一つかすかな星を呼びさました覚えもあつた。

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

沼にはおれの丈《たけ》よりも高い芦が、ひっそりと水面をとざしてゐる。

おれは遠い昔から、その芦の茂つた向うに、不思議な世界のある事を知つてゐた。いや、今でもおれの耳には、Invitation au Voyage の曲が、絶え絶えに其処《そこ》から漂《ただよ》つて来る。さう云へば水の※  
「# 均のつくり」、第3水準[1-14-75]と一しよに、あの「スマトラの忘れな艸《ぐさ》の花」  
3水準[1-14-75]と一しよに、あの「スマトラの忘れな艸《ぐさ》の花」  
も、蜜のやうな甘い※「# 均のつくり」、第3水準[1-14-75]を送つて  
来はしないであらうか。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、その不思議な世界に憧《あこ》がれて、蔦葛《つたかづら》に掩はれた木々の間《あひだ》を、夢現《ゆめうつ》のやうに歩いてゐた。が、此処《ここ》に待つてゐても、唯芦と水とばかりがひつそりと拈がつてゐる以上、おれは進んで沼の中へ、あの「スマトラの忘れな艸《ぐさ》の花」を探しに行《ゆ》かなければならぬ。見れば幸《さいはひ》、芦の中から半《なか》か《ば》沼へさし出てゐる、年経《としへ》た柳が一株ある。あすこから沼へ飛びこみさへすれば、造作《さうさ》なく水の底にある世界へ行《ゆ》

かれるのに違ひない。

おれはとうとうその柳の上から、思ひ切つて沼へ身を投げた。

おれの丈《たけ》より高い芦が、その拍子《ひやうし》に何かしやべり立てた。水が眩《つぶや》く。藻《も》が身ぶるひをする。あの蔦葛《つたかづら》に掩《おほ》はれた、枝蛙《えだかはづ》の鳴くあたりの木々さへ、一時はさも心配さうに吐息《といき》を洩《も》らし合つたらしい。おれは石のやうに水底《みなそこ》へ沈みながら、数限りもない青い焰が、目まぐるしくおれの身のまはりに飛びちがふやうな心もちがした。

昼か、夜か、それもおれにはわからない。

おれの死骸は沼の底の滑《なめらか》な泥に横《よこた》はつてゐる。死骸の周囲にはどこを見ても、まつ青《さを》な水があるばかりであった。

この水の下にこそ不思議な世界があると思つたのは、やはりおれの迷《まよひ》だつたのであらうか。事によると *Invitation au Voyage* の曲も、この沼の精が悪戯《いたづら》に、おれの耳を欺《だま》してゐたのか

も知れない。が、さう思つてゐる内に、何やら細い茎が一すぢ、おれの死骸の口の中から、すらすらと長く伸び始めた。さうしてそれが頭の上の水面へやつと届いたと思ふと、忽ち白い睡蓮《すゐれん》の花が、丈の高い芦に囲まれた、藻の※「#」均のつくり」、第3水準「1-14-75」のする沼の中に、的※「#」白十樂」、第3水準「1-88-69」《てきれき》と鮮《あざやか》な荅《つぼみ》を破つた。

これがおれの憧《あこが》れてゐた、不思議な世界だつたのだな。——おれの死骸はかう思ひながら、その玉のやうな睡蓮《すゐれん》の花を何時《いつ》までもちつと仰ぎ見てゐた。

「#地から1字上げ」（大正九年三月）